

# 耕

第三十六卷 第2号 通巻402号

## 目 次

発刊のことば	表 2
草笛	加藤 耕子 1
ロシア紀行(2)	関森 温子 3
樹林集 I	稔 子・他 5
樹林集 II	敦 子・他 12
選評寸言	加藤 耕子 20
秀吟集	加藤耕子選 21
七月号樹林集Iより	平戸 俊文 23
紹介 一句集・著作一	和出 昇 25
紹介 一俳誌一	浅野まこと 26
随筆 花火待つ	藤島 咲子 29
コロナ禍を暮らす	棚橋 洋子 30
節気(芒種・夏至)	王衆一・王岩訳 31
こだま・句会報・あゆみ・編集後記	32
朗人句碑	長瀬 きよ子 表 3

題 字 醉墨庵主 石田泰邨

草笛

加藤耕子

地に近く眼前横切る梅雨燕

雨つづく淡き紅もつ額あぢさゐ

建前の音高ひびく半夏生

くちなしや人のこころのさびやすき

新茶汲む終の住処といふところ

植込みへ夏蝶雀降るやうに

素足かな板の間を踏み畳ふみ

紫陽花の毬撓ひるる地鎮祭

草笛や年上がまづ吹いてみせ

遠山脈空と一つに夏霞

## ロシア紀行 (2)

関森 温子

前回、ロシア留学までの経緯をお話したので、今回からロシアでの生活などのお話を書いていこうと思う。昔の話なので今とは大分様子が変わっている事を前置きしておきたい。2年間の留学の前に、1ヶ月間ホームステイで短期留学をし、それでは満足できずに更にアカデミーで勉強したい旨をゲルギエヴァ女史に伝えたのだが、その際「アカデミーはあくまでも研修所であり、学校ではないので住居、語学に関しては自分で何とかすること」と釘を刺された。コンセルヴァトリー(音楽院)なら寮も外国人向けのロシア語レッスンもある。だが、アカデミー自体留学生が少ないうえに短期が多く、そのようなシステムは考えられていなかった(ちなみに、ロシア語は言語の中でも難しいと言われ、あるロシア人にロ

シア語はクレイジーな言語、よく学ぶ気になった、と言われた)。諸々を考えると語学留学をプラスする道もあったが、アカデミーに在籍していたら両立は無理、と暗に匂わされた(その意味はすぐに知る事となる)。ロシア語は1ヶ月担当してくれたターニャにお願ひし、住まいはホームステイ先に頼むことも視野に入れた。

ロシアの住宅は2つあり、1つはコムナリ(キッチン、バス、トイレ共同、ワンルームのシェアハウス)で、地方出身者は家賃の安さからこちらに住む人が多かった。もう1つはクヴァルチーラ(キッチン、浴室、トイレ付の部屋)。語学勉強を考えると前者だが、拙い言語能力で意思の疎通が取れない、プライバシー保護などを考え後者を選択。ツテを頼った結果、私と入れ違いで帰国する留学生の後、そのまま部屋が借りられる事になったのは渡航1ヶ月前の事だった。部屋にはベッド等の家具、冷蔵庫等必要な物は揃っており、更に残していつてくれたアップライトピアノ等のお蔭で何一つ困ることはなく、これも縁が繋がったものの一つだ。

この部屋は小さな運河沿いにあり、夏には運河を行く観光ボート、冬には寒々しい雪景色が窓から見られた。近くにはニコライ教会というロシア正教会の教会があり、部屋からは美しい正教会特有のネギ坊主の屋根が見え、鐘の音(ね)が聞こえた。正教会の鐘の音(ね)はヨーロッパのそれと違い、単音から始まり様々な高さの音が増して、それが重なり合って美しい合奏となる。初めて聞いた時、この鐘の音(ね)がラフマニノフ(バンクーバーオリンピックで浅田真央氏が演技の際に使用した作曲家)の様々な作品の中でモチーフとして散りばめられている事が理解できた。百聞は一見に如かず…。「どのような音だろう」と興味のある方は(ロシアで空気の振動と共にお楽しみいただくのが一番だが)「スズダリ 鐘の音」で検索してみてもいい。ロシアの空気と異国情緒あふれる鐘の音に出会えるはずだ。鐘を撞く技術は演奏者の如く、そしてコンサートの如し、である。

そんな素晴らしい街での期待に満ちた生活は、アカデミー開始と共に一変する。

(続)

### 雑学 鳥獸植物戯詩

全24回

八木幹夫

#### 第8回 【秋篠寺の秋―幻の写真―】

真夜中に目が覚めた。男三人で旅に出た。(今から五四年も前のことだ。)目的地は奈良京都方面。受験勉強の束縛から解放されユースホステルや野宿で寝泊りし、十日間ほどのアバウトな貧乏旅。二人の友人は早稲田、東大に落ち着く。私たちの年齢は19歳か20歳。旅の後半の目的地は秋篠寺。八月末の蟬時雨、門を抜けた途端その付まいに馬鹿話が止んだ。本堂の右手に秋の薄紫が揺れる。堂内の闇に目が慣れ伎芸天がぬつと立つ。外の暑さもあつてしばし堂内で涼む。見学者はほとんどない。そのお顔の柔和な慈愛にいつのまにか包まれていることに気付く。豊かな時が流れた。

外に出ると或る人と出会った。付添カメラマンが数学雑誌の表紙に使うので写真を撮らせてほしいという。まばらに咲いた秋の前で誰か判らない先生とバシヤバシヤ。「戦後の日本は昔のものを捨て去ったが、君達のような若い学生が東洋的な情緒に関心を持つのは嬉しいことだ。」その後、理系の友人の調べで数学者の岡潔氏と判明。古典や仏像から学ぶことは尽きない。さて、岡先生、半世紀前の幻の写真は今いずこ。

公益社団法人 俳人協会

## 樹林集 I

夏の蝶

菊井 稔子

夏めくや川の中州に羽打つ鳥  
山風に流され岸の夏柳  
どの路地をゆくも坂径夏の雲  
ふたりして歩み来し道水木咲く  
突と来て結界こえし夏の蝶

薔薇館

藤島 咲子

朝風や門ひらきたる薔薇館  
かかげ立つ宝珠あまたや紅薔薇  
庭園のうすくれなるの薔薇百花  
庭園の薔薇の真紅に雨しづく  
杉菜原警笛高く長き貨車

夜の薄暑

西尾 玲子

供花に剪る花より蝶の翔ちにけり  
読みかへす本の一節余花の雨  
葉桜や人無き木椅子向き合ひて  
ポシエツトに鳥類図鑑五月来る  
長き文かしこで結び夜の薄暑

啓蟄

赤嶋 千秋

啓蟄や軍手取り出す納屋の隅  
啓蟄や屈背に歩く岨畑  
のどけしや蝶の来てある墓の供華  
昼告げるサイレンの音芽ぐむ蘆  
春陰や傾ぐ棕櫚の木陶の椅子

風光る

矢神 史子

野暮用も徐徐に戻りぬ花は葉に  
大皿に庭の草花灌仏会  
園児らの並んで掛ける甘茶佛  
楠大樹匂ふばかりに若葉萌ゆ  
風光る歩く砂浜心地よき

春霞

田島 文子

遠山の近づく思ひ春霞  
三日間日記忘れぬ初音聴く  
人影のかんばせ白し春の夕  
春昼の音は古町寺の鐘  
ものの芽の宿す力を信じをり

亀鳴けり

清水 京子

高齢に前期後期や亀鳴けり  
春逝けり自肅疲れと雨に暮れ  
若葉雨ときに激しき音をたて  
若き日に戻るキャンパス風薫る  
みどりさす窓辺に開く新句集

薄暑

大槻 制子

鳴く鳥の名は知らねども緑さす  
二重虹短詩型恋ひ追ひ求め  
輝きて何はともあれ五月好く  
一滴の音耳奥に新茶汲む  
小流れの水音清か薄暑かな

泰山木

山中 敬子

蒼穹へ泰山木の無垢の花  
緋櫛の面白き壺青楓  
古民家の土間にさし入る若葉光  
本堂の一畳に坐し夏書かな  
田水搔くかるがも一羽若葉風

独り酒

浅野まこと

独り酒朝摘み土筆の玉子綴ぢ  
公園の砂場の山へ散る桜  
落ちもせず枝でひからびる紅椿  
知らぬこと多き世の中うらけし  
知りたきと想ふ心や春うれひ

薔

棚橋 洋子

大鍋に滾る湯薔を板ずりす  
茹で上げる弓なりの薔皮を剥く  
水口に掠鳥の水浴び田水張る  
若竹の葉の浅みどりそよぎをり  
草覆ふ野川を低く夏つばめ

大瑠璃

長瀬きよ子

大瑠璃の声官池の向かうより  
老鶯に窓開け放つ健康館  
ほととぎす谷をはさみて法の山  
四十雀森の氣息のゆるびけり  
青鶯の脛水に入り動かざる

鯉のぼり

鈴木 敦子

柿若葉風に朝日のはねてをり  
城址てふ石積む一所松の芯  
里山の風をはらみし鯉のぼり  
知り尽くす床屋の廂つばめ来る  
全集の一書欠きたる春愁ひ

松に蕊

山川 和代

名古屋城石垣に沿ふ松に蕊  
参道のせせらぎの音初夏の宮  
制服の短めの丈夏来る  
紫陽花の葉脈を透ける雨上がり  
花あやめ雨こまやかに降りそそぐ

初つばめ

浦澤久美子

木隠れの馬頭観音春落葉  
初つばめ今日は小走り登校子  
山国や家廻る春の水  
藤房の揺れてむらさき雨雫  
老鶯の声を近くに庭手入

濃あぢさる

松田 榮作

嬰鑠と靴はく母や濃あぢさる  
期せずして子よりあぢさる届きけり  
風の中蒼あまたのカーネーション  
スマホ手の登校いそぐ夏帽子  
文庫本手の下校子や夏さやか

田起し

深谷 幸夫

田起しの土啄める鳥一群  
野良の朝脇をかすめるつばくらめ  
山桜の明かりほのかや溪の畑  
夕風や桜葉降る池の傍  
朝の水田首を傾げる水鶏かな



春深し

和出 昇

そそり立つスカイツリーや春日傘  
初夏の東京駅に降り立ちぬ  
明治の香残る駅舎や春深し  
うららかや皇居外苑巡りける  
雲の間に富士の嶺見ゆ藤の花

牡丹

小笠原貞子

鳥降りて風のをさまる麦畑  
園児の列行き戻りつつ麦畑  
牡丹や白き芳紙の女文字  
列島の夜深けのたより別れ霜  
裏木戸の小流れ今も柿若葉

若楓

長谷川美幸

しなやかに影を揺らして若楓  
奉納の胡蝶の舞や楠若葉  
里山にジュラ紀の地層蕨狩  
山道に影を差し伸べ花通草  
泥ならば田んぼにたんと燕来る

谷若葉

西村 青夏

光りつつ堰を越す水谷若葉  
美人の名冠する薔薇に棘あまた  
実況の舌よくまはる五月場所  
子も孫もみんな息災柏餅  
待つ時の時間は長しほととぎす

花散る

増田 野遊

花散るを大和心と言ふまじき  
坂多き学校への径雪柳  
初燕床屋の軒を居と定め  
また一つ椿落つ音風の中  
茅花囓む甘さ遠き日ありにけり

雁帰る

坂崎紀代子

暁の九輪の空を鳥帰る  
棹になり鍵になりては帰る雁  
二番手の棹は短かし雁帰る  
曇天の一枝もゆれず朝ざくら  
春灯や遺言セミナーへの誘ひ

つばくらめ

内沼 洸

菩提寺に桜薬降る朝かな  
玄関に手土産ひとつフリージア  
百年の本屋の軒をつばくらめ  
春深し老女は語る塩の道  
万緑や城を仰げる産湯の井

白詰草

森島 幸代

母の手を真似て編みたる白詰草  
尾を振れる犬の鼻先熱れバナナ  
夕焼くる向かひのピルの硝子窓  
春塵を払ひこぎ出すサイクリング  
有松の厠の木戸の百合一輪

藪草

山本 洋子

紫陽花や郵便局へ通ふ徑  
点点と庭の藪草白灯す  
薄荷の香仏間に広ぐ薄暑かな  
桧の型に鮪庄す母のたなごころ  
苜蓿歩道占抛する勢ひ

池畔

野瀬めぐみ

さみどりの池畔に群るる羊蹄の花  
芍薬の紅さす荅花頭窓  
新樹光テニススコートの球の音  
さみどりのさざなみの池囀れり  
倭の国の山河は青し武具飾る

緑立つ

石川 富子

鯛挿して波静かなり鳩の海  
校庭に藩校の碑や緑立つ  
花吹雪淡海の風のやはらかに  
行く春や湖の片方に芭蕉句碑  
山門の朱の鮮やかに若楓

水の音

上杉さち子

山よりの激しき流れ水芭蕉  
湿原の流れの底や岩魚影  
父遺す本より栗黴匂ふ  
宮参り赤子のつかむ若葉風  
軒低き本町通り葛饅頭

行春

稲垣 節子

雲梯の順を待つ子に若葉風  
行く春や振子時計の重き音  
葉桜の揺れて始業のチャイム鳴る  
揺れ合うて藤房香広げをり  
溜池の多き村なり余花の雨

松の花

牛田さつき

春陰や病室までの白い壁  
野の墓碑の銘のうすれて草萌ゆる  
春落葉乾きし音を重ねけり  
天守より四方の山並松の花  
使はれぬ茶箱に八十八夜くる

若葉光

瀬川 桃士

中洲の木下流に傾ぐまま芽吹き  
幹捻れ間に覗く藤の花  
畑打や鎌の返せる日の光  
これよりは彼岸桜ぞ早や満開  
戸袋の厚き古民家若葉光

葉桜

平戸 俊文

古い二人葉桜となる登城坂  
春灯や碁石打つ音洩れ来たる  
老鶯や筆塚に立つ大師像  
杣人へ天の散華か余花落花  
朝日影花冠正せる白牡丹

麦笛

高羽 昭子

ガムのごと麦の穂をかむ山の畑  
麦笛を鳴らし日暮れの山降りぬ  
木造の母校は図書館花は葉に  
霾ぐもり起重機動く移転校舎  
額入りの木彫のヨセフ花水木

花の雲

岩田美津治

仁王門よりも高きに花の雲  
春愁や眉根を寄せし阿修羅像  
池越しに望む相輪風光る  
佐保川の水音軽き朝桜  
鷗尾光る大仏殿や花万朶

枳殻

加藤せつ子

柔らかき棘の枳殻花香る  
檜皮葺きの本丸御殿花吹雪  
風光る清正公の石曳き像  
路地裏のなづなの花や幼摘む  
早緑の遠山陰に山桜

若楓

日比野里江

春の土しきり啄むすずめ二羽  
登り来し丘五月雨の修道院  
陶土掘る山肌五月の風渡る  
伽羅蔦を煮る庭先に摘みしもの  
雨音の枝しなやかや若楓

発行所移転のお知らせ

「耕」発行所を左記住所に変更致します。

結社誌等送本の送付先を変更のほどよろしくお  
願い申し上げます。

移転先

〒四九四―〇〇一六

愛知県一宮市東加賀野井字東川原三六

岩田美津治方 耕発行所

電話・FAX 〇五八六―六八―二四〇七

樹林集 II 耕子選

窓若葉机に歳時記電子辞書  
寺廂仕上がり近き燕の巢  
むかれたる筍白く輝けり  
新樹光生後二十日の牛の背  
蠅払ひをり牛の尾のしなひをり

日進 鈴木 敦子

コロナ禍にめげぬ力士や五月場所  
家族して小川に遊ぶ五月かな  
藤の花大社の銘菓「くつわ」買ふ  
業平の訪ひし池畔やかきつばた  
風薫る牧場に子牛産まれける

岡崎 和出 昇

さざ波の下の平和や蝌蚪の国  
鈴蘭の香り束ねて供へけり  
背比べのやうに虎杖風の土手  
たちまちに日の翳る路地濃山吹  
てのひらに打ちて木の芽の香を碗へ

瀬戸 中川 廣子

疫病を払ふ太鼓や能登の夏  
岩と岩菜の花明かり海原へ  
石塀の風に浮き立つ鉄線花  
遠雷や日矢一闪の日本海  
自肅中愛唱曲や古茶新茶

金沢 高羽 昭子

杉菜手に腕白盛り昭和かな  
谷川の吊り橋揺るる初夏の山  
山若葉天守を遠に村はづれ  
立夏の山馬頭観音風の訪ふ  
大樹寺に登四郎の句碑余花の雨

名古屋 内沼 洸

老いてなほ小さき変身サングラス  
守り継ぐ憲法九条五月晴れ  
天下人育てし城や樟若葉  
梅雨ありてこそ瑞穂の国ならむ  
父の日や愚直に生きし父のこと

春日井 西村 青夏

葎草の根つこの深さてこずりぬ  
杜若葉一の鳥居で一礼す  
熱田大神を祀る宮樟茂り  
桑若葉かつて養蚕業の家ありて  
葉脈へ日の透き徹る桑若葉

名古屋 山川 和代

伊那谷に広がりんこの花あかり  
里川に魚影戻るや驟雨過ぐ  
踏み切りを自在に掠め夏つばめ  
一竿に干さる野良着や植田風  
路地裏のよろず屋今は吊忍

春日井 高木 純子

クローバー四つ葉を得たる朝かな  
にごろ鮎の湖水の堰や小判草  
生垣に風やはらかき五月かな  
花丸の答案用紙風薫る  
花棟小雨にけふる川堤

名古屋 小笠原貞子

うららかや遠くに見ゆる牛の群れ  
透きとほる嬰の耳たぶ風光る  
レコードの針飛ぶ音もあたたかし  
校門の春落葉踏む転校生  
山積みの古書掘り起こす遅日かな

一宮 岩田美津治

母の日の文添へ届く花と筆  
開け放つ法事の座敷夏燕  
起り屋根緑雨に濡るる庭の石  
馬術部の馬囀ひより若葉食む  
花祭甘茶蔓の葉捜し揉む

名古屋 加藤 節子

潮風や丘埋め尽くす水仙花  
早春の光に広ぐ細き枝  
春風に揺るる几帳や法隆寺  
手直しの泥を唾へてつばくらめ  
啓蟄や土の湿りのやはらかく

一宮 岩田 和恵

春光や水面に揺らぐ城の影  
屋根瓦古き駅舎や棕櫚の花  
稲葉山ひかりを放つ椎若葉  
天守へと「瞑想の径」山若葉  
春の虹願ひ一つの鐘を撞く

扶桑 棚橋 洋子

母の日や話し相手を恋ふてをり  
子供の日「なぜ」を重ねて育らゆく  
矢車の鳴るや寺領の保育園  
紫雲英田を鋤くトラクター音進む  
叱られし事遥かなり葱坊主

春日井 稲垣 節子

子の髪に五月の風の匂ひかな  
若者の長き脛行く街薄暑  
五月晴米とぐ音のリズム良き  
さみだれや名もなき川の無気味なる  
梅花藻や板一枚の橋渡し

名古屋 牛田さつき

葉桜の中それぞれに下校の子  
電線に声高高と夏燕  
笛を茹でる大鍋糠まみれ  
杜新樹雨青青と降りにけり  
おためしの絵図や人みな笑顔なり

名古屋 寺島 洋子

五月来る棚田の風の軽くなり  
大木曾や身を翻す夏つばめ  
憲法記念日弟の誕生日  
春の蕨摘んで煮てみる夕ごころ  
鷲苔や杖つくひとの土地ことば

小牧 藤島 咲子

花菰の星敷きつめて農の庭  
大河へと傾るる野面芝ざくら  
目鼻欠く狛に卵の花腐しかな  
洗堰の逆巻く水泡夏に入る  
チャート層台地に古墳夏霞

犬山 長瀬きよ子

海光へ段なせる畑枇杷熟るる  
枇杷売の今朝富士山の見えしこと  
窓少し開けて河鹿と同じ闇  
衣更へてきのふのことはるかにす  
草茂る百葉箱の白を立て

春日井 西尾 玲子

神と人に誓ふ婚礼聖五月  
教会のクルス金色麦の秋  
若葉風大仏殿の鷗尾高し  
風を行く尼僧の衣余花あかり  
柿若葉むきしばかりの茹玉子

瀬戸 山中 敬子

初夏の木木地味に静かに小さき花  
一瞬の風の吹き来よ麦畑  
若き樹のかたちととのふ聖五月  
再会にあふることば樟若葉  
半纏の男に掃かれ夏落葉

名古屋 坂崎紀代子

初燕城下の空を縦横に  
立札に売物件と野ゑんどう  
樟若葉すつくと立ちて青年期  
花楓こまか無数とはこのことか  
崖上に立つ白き城夕永し

犬山 加藤 直子

天神を祀る頂老鶯  
柚道の先へ先へと杜鵑  
子燕の餌ねだるこゑ軒の朝  
街の灯を映す水田や夕蛙  
鷺群れて頸伸ばしるる出水川

可児 平戸 俊文

芝居小屋残る集落桃の花  
地歌舞伎の見得に掛け山笑ふ  
打ち返へす兄の速球五月くる  
風薫る靴新しき老夫妻  
夏立つや艇庫の窓に人の影

常滑 久野 克生

はまなすや北の浜辺の海の香を  
海女縫いしマスクの色の浜遠く  
山峽の晚き桜やまだら雲  
さみだるる破れ幟の地藏堂  
梅の実の葉がくれにたわわ雲流る

名古屋 横井あつ子

群生や折れる音たつ夏蕨  
舞ふやうに一片二片竹落葉  
コロナ禍の自粛続くや更衣  
ひるがへる葉裏葉表青嵐  
早朝の軽やかな身や更衣

瀬戸 野瀬めぐみ

茅花流しハーレー止まるそば処  
一万歩コースの案内夏マスク  
夏の夜雲の切れ間の月を待つ  
はやばやと湖畔のあかし合歓の花  
ワクチンの再予約終ふ薫風裡

名古屋 松田 榮作

雨風の闇つれてくるさし芽どき  
古切手昭和平成臚かな  
種芋の赤芽は雨を呼びにけり  
打ち勝てず義弟の逝きし春の闇  
妹の影淡くしてさみだるる

小牧 丹羽 初子

薔薇園の花の名前の多かりき  
日日籠もる世の草に木に五月来る  
休耕田広がる中や麦畑  
十葉の勢ひに向かふ八十路なり  
街道に濃き影おとす葉桜よ

小牧 勝田 陽子

コロナ予防接種決まらず五月来ぬ  
先輩のくせ字の文や風薫る  
新婚の挨拶硬し夏来る  
団子虫手の平にのせ青葉風  
女生徒のマスクの笑顔若葉照る

名古屋 木村 誉子

菓売りの突ゐてみせたる紙風船  
菖蒲湯や孫に聞かせる万葉歌  
百選の潮騒の音夏来る  
新任地へ向ふ車窓や麦の秋  
じつとしてをらぬ小羊若葉風

春日井 石川 富子



つぎつぎと鳥声放ち緑さす  
母の日を思ひおこしぬ届く花  
青空を海の彼方へ梅雨に入る  
山裾の寺領明るし山法師  
青梅雨や青の近江を聖火過ぐ

知多 大槻 制子

図書館の蔵書百万窓若葉  
剪定の職人帆布の道具囊  
亀の子や右往左往の石の上  
一晚で親竹越ゆる今年竹  
爪先で探る筍朝日差す

名古屋 長沼 富美

夏に入る鞆代りに紙袋  
梅雨晴れ間鏡の中の紅も濃き  
新玉葱届く袋に屋号入り  
母の日や手作りケーキたのみたる  
通販や旅に行きかう夏帽子

明和 石田 昌子

長靴の音弾みをり梅雨の朝  
八幡山古墳の濠や姫女苑  
囀りの雲なき空をつきぬけし  
獅子唐の苗風除けに守らるる  
背をぐんと伸ばし莢豌豆千切る

名古屋 山本 洋子

芽吹き初む熱田の杜を聖火発つ  
テラスより子ら脚垂らし石鹼玉  
葉桜へ少年初のホームラン  
ミロの絵の麗らもの皆宙に舞ひ  
樟若葉禰宜を先立て婚の列

名古屋 兼松 悟

夏来たる板張り廊下の足裏に  
雨上がる夏草の根の五寸ほど  
新聞の中から葉物芋虫も  
薄桃色の母の好みのアマリリス  
春の夜や「いないいないばあ」をもう一度

名古屋 森島 幸代

入れ替り砂浴ぶ鴉梅雨晴れ間  
真昼間を高く低くと夏の蝶  
夏草の踏み分け径や風少し  
低く来て高く去りたり夏燕  
実生なる楓の若木梅雨に入る

春日井 日比野里江

島二周のサイクリングや子供の日  
山の湯やバス待つ間蘆を採る  
木目揃ふ木地師のお椀柿若葉  
畳敷く礼拝堂や窓若葉  
青山椒をジビエ料理に婦人会

春日井 上杉さち子

若葉風まうしろを向く羅漢様  
ゆで上げし筍二本信濃の香  
折折の川風親し合歡の花  
とらねこの絵本の手擦れ柿若葉  
乳呑む子母も汗してしづかなり

春日井 浦澤久美子

一と雨に色淡く散る鉄線花  
母の味遠し蔭の葉香の深く  
スプリングラー薔薇と濡れをり少女像  
先生の綽名のことも葱の花  
新茶汲む小さき湯呑を手に包む

名古屋 井上 玲子

山裾や蛙鳴き出す水張田  
飛び上るホールインワン夏初め  
足元に用水響く田植どき  
薄紅の山芍薬や岩の陰  
しばらくは一人楽しむ氷菓子

小牧 伊藤美奈子

風薫る宅地造成すすむ丘  
竹林の中の小流れ射干咲けり  
草青む呼べば寄りくる木曾の馬  
来し道やなんじやもんじやの花真白  
鋭き声の一羽飛び立つ梅雨の空

名古屋 菊井 稔子

名の「春」の一字墓石に花菖蒲  
高僧の出棺の鐘 五月闇  
篋に嵩ある音や落椿  
銀杏咲く先代和尚は教師たり  
袋掛け爺の遺せし桃一樹

小牧 増田 野遊

移転せし市役所の壁蔦茂る  
山寺の奥の院まで茂たる  
仁王像の守れる寺や樟茂る  
鯉のゐる里の小川や薄暑光  
里山へ続く道の辺額の花

知多 久野美佐子

忌に集ふ無口変はらず花は葉に  
梅雨に入るパン焼く香り籠りけり  
薫風やひねもす釣りの二三人  
葉桜や壕に沿ひゆく人力車  
二年振り春運動会 淡淡と

小牧 長岡 通子

入籍を済ます報告夏来る  
寒暖の差の厳しさや更衣  
立ち並ぶ合掌集落夏つばめ  
閑居して老いのたしなみ新茶汲む  
日の本に青田の青や行き渡る

春日井 勝田 康一

天を突く若葉大樹の杜行けり  
十あまり付きて鈴蘭匂ひけり  
葉隠れの青梅どれもうひうひし  
並びたる明るき色や箱の枇杷  
瓶の牡丹日毎大きく開きけり

小牧 山田 蜜柑

畏みて武家の末裔武具飾る  
母の日や子の手料理を据膳に  
籠り居を揺さぶりをりぬ青嵐  
薔薇咲けり薔薇好きの師を遠くして  
葉に紛れ蓴のさみどり柿の花

名古屋 清水 京子

斑蝥や逆らひて行く道もあり  
古本屋薄暑の埃積み重ね  
燕来る知方は左なご屋道  
避妊せし猫のふて寝や梅雨に入る  
諦めと前向き半半夏立ちぬ

名古屋 寺澤はる子

雄鳧の高き鳴き声田をわたる  
母の日の薔薇は今年も盛りなる  
道標の馬頭観音矢車草  
鳴き声に応ふものなし鳧の恋  
万緑や母へと向かふ嬰の靴

小牧 瀬川 桃士

霧島躑躅や寝釈迦のさまに阿蘇五岳  
庭に咲くスイートピーの香食卓へ  
青空の中へげんげ田鋤き込める  
抜きんでて天王山の桐の花  
街道は古地図のままに麦青む

犬山 長谷川美幸

噴水の音が掻き消す話し声  
雛罌粟の牧場の風や柵に鞍  
洞穴に船を留めし苔の花  
前穂高仰いで歩く若葉風  
草取りの奉仕を終へし朝の経

名古屋 鈴木 彦一

年重ね花いとほしき泰山木  
ふるさとの春夕焼やオムレツの香  
遠足の子等呑みこみし森深し  
雲流る梅雨の晴間に友来る  
病む猫に食べさせたしと求む鮎

名古屋 谷口 馨子

風炉点前面壁達磨に先づ献ず  
黄の牡丹面壁達磨の供花として  
丈山の里金色の麦輝けり  
ガレージに玉葱吊るす新世帯  
新緑の古代の古墳めぐりたり

豊明 近藤 兼雄

消えさうで又立つ噂養花天  
尼寺に住みついてをり孕み猫  
眠る山起こし名案得る事も  
内覧の下足袋や春の城  
何時の間に母の齢を越え残花

名古屋 寺澤はる子

梅雨晴間南北の窓開け放つ  
紫陽花や流れにまかすこともよし  
煮物には母のレシビや茄子の花  
新樹光園児の背ナにランドセル  
クラス会レースの上着腕に掛け

名古屋 矢神 史子

「耕」七月号 訂正

ロシア紀行 五頁上段 九行

故エレナ・オブラストコワ女史

ロシア紀行 六頁上段 十五行

国立フィラルモニア（グリーンカホール）

樹林集Ⅰ 二十一頁下段 十六行

さへづりや清洲越なる宮の杜

随筆 朱鷺の空 四十五頁上段 三行

荒海や佐渡によこたふ天河 芭蕉

## 選評寸言

加藤 耕子

蠅はまばら払はらひをり牛うしの尾おのしなひをり

鈴木 敦子

誰でもが目めにしている牛うしが寄よつて来きる虫むしを払はらう様子ようすであるが、上七・中五・下五の言葉の意味の流れが素直すじに読み手の心こころの中なかへ落ち着おちく。写生せいせいの力ちからである。

藤ふじの花はな大社たいしやの銘菓めいか「くつわ」買かふ

和出 昇

津島大社の門前町の参道で売られているのが「くつわ」。非常に固い焼菓子。津島神社は船二艘を連絡した上の山車が天王池を渡る七月の津島祭で知られているが、その池の藤の花もまた見事。津島祭は疫神を流す行事。

さざ波なみの下したの平和へいや蝌蚪かたの国くに

中川 廣子

風かぜが起おこす水面すいめんのさざ波なみ。お玉杓子、蛙の幼生おとこが寄り合あっている。何でもない、事のない様子を平和と捉えられた。一言に平和と言うが、内容はむづかしい。平和と言う観念を蝌蚪の集団・蝌蚪の国という眼前の景で具体的に表現された。「さざ波の下」が微妙。

遠雷えんらいや日矢ひや一閃いつせんの日本海にほんかい

高羽 昭子

他の雷の現象と共に、遠くで鳴るかみなり、遠雷は夏の季語となっている。積乱雲（入道雲）が立ち上っている日本海、その雲間から一瞬日が射したのである。日矢一閃の切迫感が、上五の季語、下五の日本海と響き合あって大景をよくまとめられた。

杉菜すぎなて手に腕わん白盛はくせきり昭和しやうわかな

内沼 洸

昭和生まれのご自分の少年時代の回想の句であろうか。杉菜が出る前の淡い褐色の胞子茎である土筆の句は多いが、杉菜の句は少ない。杉菜を手にして嫌がらせをしている少年の徒好きの悪ふざけの様子。昭和という大へんな時代も一人の人生にとっては、どの時代とも変らぬ姿があった。

守りまもり継つぐ憲法けんぽう九条くじゅう五月晴ごがつきばれ

西村 青夏

今年ことしはコロナ禍の為、諸行事が静かであったが、掲句の重要性は変わらない。五月晴の季語が、心なしか気になる所ではあるが、何としても守りたい憲法九条である。

熱田大神を祀る宮樟茂り

山川 和代

熱田大神を祀る宮は熱田神宮のこと。熱田大神を主神とし、相殿に天照大神・素戔鳴尊・日本武尊・宮寶姫命・建稻種命を祀る。神体は草薙剣。熱田台地は樟が多いので、樟の宮とも呼ばれている。樟の杜である。

路地裏のよろず屋今は吊忍

高木 純子

人家の間の狭い道にある種々のものを商う小店。その店に釣忍が軒場につるしてある。羊歯を根から集めて作られている。涼しさを目に出来る夏の風物である。まだ残る昭和の景。

山積みのお古書掘り起こす遅日かな

岩田美津治

学生時代からの愛読書はなかなか手離すことがむづかしい。知らず知らずに積み重ねてある。古書掘り起すに、一冊の目的の本を探している作者の姿がうかぶ。日は長い、それにしても困ったことだ。読ませていただく方が「くすり」と思う一句。

手直しの泥を唾へてつばくらめ

岩田 和恵

燕の巣作りの様子が詠んである。毎日何度も仰ぐ燕の巣と燕の姿への愛情の一句。今年もよく来てくれたの氣持も加わる。

子供の日「なぜ」を重ねて育ちゆく

稲垣 節子

子供、ことに幼児の日常がそのまま詩になった。子供を育てることは、大人の心をも育てることと思う。

秀 吟 集

大樹寺に登四郎の句碑余花の雨

内沼 洸

老いてなほ小さき変身サンングラス

西村 青夏

一竿に干さる野良着や植田風

高木 純子

透きとほる嬰の耳たぶ風光る

岩田美津治

クローバー四つ葉を得たる朝かな

小笠原貞子

花丸の答案用紙風薫る

小笠原貞子

馬術部の馬囲ひより若葉食む

加藤 節子

天守へと「瞑想の径」山若葉

棚橋 洋子

子の髪に五月の風の匂ひかな

牛田さつき

杜新樹雨青青と降りにけり  
 洗堰の逆巻く水泡夏に入る  
 神と人に誓ふ婚礼聖五月  
 樟若葉すつくと立ちて青年期  
 憲法記念日弟の誕生日  
 驚苔や杖つくひとの土地ことば  
 衣更へてきのふのことをはるかにす  
 一瞬の風の吹き来よ麦畑  
 子燕の餌ねだるこゑ軒の朝  
 地歌舞伎の見得に掛け声山笑ふ  
 早朝の軽やかな身や更衣  
 古切手昭和平成臚かな  
 種芋の赤芽は雨を呼びにけり  
 団子虫手の平にのせ青葉風  
 さみだるる破れ幟の地藏堂  
 茅花流しハーレー止まるそば処  
 十薬の勢ひに向かふ八十路なり  
 菓売りの突ゐてみせたる紙風船  
 じつとしてをらぬ小羊若葉風  
 青梅雨や青の近江を聖火過ぐ

寺島 洋子  
 長瀬きよ子  
 山中 敬子  
 加藤 直子  
 藤島 咲子  
 藤島 咲子  
 西尾 玲子  
 坂崎紀代子  
 平戸 俊文  
 久野 克生  
 野瀬めぐみ  
 丹羽 初子  
 丹羽 初子  
 木村 誉子  
 横井あつ子  
 松田 榮作  
 勝田 陽子  
 石川 富子  
 石川 富子  
 大槻 制子

# 俳句

## 8月号

### 予告

7月26日発売  
予価1,040円(本体945円)㊞

**特別作品** 黒田杏子・井上康明・奥坂まや

**大特集**  
**俳句の明るさ**  
 ▼総論 俳句の向日性……………江中真弓  
 ▼各論 「極楽の文学」再考／俳句に救いはあるか／俳句と  
 いう詩型の「明るさ」／明るさとユーモアの違い／私  
 の「極楽の一句」  
 ▼座談会 俳句の明るさの魅力…池田澄子・星野高士・  
 対馬康子・小澤實

**特集**  
**回想をどう詠むか**  
 奥名春江／松尾隆信／能村研三／水田光雄／  
 三村純也／網野月を／山田佳乃

**句集特集** 日本の俳人100 **井上弘美「夜須礼」**

**連載再開** **偏愛俳人館**……………恩田佑布子

**付録** 季寄せを兼ねた **俳句手帖秋**

※内容は変更になる場合があります。

**電子版同時発売!** 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

七月号樹林集Iより

平戸 俊文

露の臺どこでも止まる村のバス

上杉 さち子

季語は「露の臺」で春。

近年、バス利用者の減少により一般のバス会社が撤退した、いわゆる交通空白地帯解消のために、町や村が費用を負担してコミュニティバスを運行させるようになった。小型だが親しみの湧くデザインが施され、高齢者を中心とした地域住民の足として活躍している。掲句は、そんなコミュニティバスが走る山村の一光景を詠んでいる。

作者は、旅の途中でコミュニティバスが村の中を走っているのを見かけたのであろうか。停留所ではない所でバスが止まり、村のお年寄りを乗せていった。バスが走り去った道端には、ほころびかけた露の臺が二つ三つと顔を出していた。なんとものどかな光景である。

どこでも親切に止まってくれ、行きたいところへ連れて行ってくれるという親近感や安心感を、村の人たちが感じているであろうことが、掲句を通して想像できる。

「露の臺」という季語が効いている。

若布刈る阿吽の呼吸夫婦船

牛田 さつき

季語は「若布」で春。

若布は養殖もされているが、海中の岩についた天然の

若布を刈り取る若布漁も各地で行われている。海岸沿いの水深二メートルほどの海底に生えている若布を鎌で刈り取り、船上に揚げていく。独りで操船して覗き眼鏡をつかって長い柄の鎌で刈るといふ漁法もあるようだが、掲句に詠まれているのは夫婦二人で行う若布漁だ。

長年苦業を共にして漁をしてきたご夫婦であろう。ご主人が舟の舵を取り、奥さんが若布を刈り取るのである。海上で小舟を安定させて若布を刈り取りやすくするのがご主人の腕の見せ所。そして、舟の揺れに合わせ鎌を操る奥さんの腕前もなかなかのもの。「阿吽の呼吸」という中七の措辞から、夫婦の熟練の若布漁の様子が想像される。

作者は、こうした漁の様子を、浜から眺めているのであろうか。掲句からは、漁の様子だけではなく、これまでの夫婦の長い生活の歴史までが感じられる。

岩肌に十五の羅漢冴返る

石川 富子

季語は「冴返る」で春。

多治見市の虎渓山永保寺には、庭園の臥龍池に面した岩壁に石の羅漢像が祀られている。掲句はこの羅漢像が祀られている早春の岩壁の様子を詠んでいる。

羅漢と言えば「十六羅漢」であるが、作者は永保寺参拝の折に、「岩壁には十五の羅漢像が祀られている。」という説明を受けたという。



十六羅漢は、第一尊者の跋羅駄闍（ばらだしや）尊者から第十六尊者の注荼半託迦（ちゆうだはんたか）尊者までの十六人の尊者を指す言葉であるが、永保寺の庫裏の玄関脇に、第一尊者の石像が撫で仏の「御賓頭盧（おびんずる）様」として祀られている。そこで第一尊者を除く十五の羅漢像が少し離れた岩壁に祀られているということなのだろう。

虎溪山の北側に位置し、東側を土岐川が流れる永保寺の早春はまだまだ寒さが厳しい。町中からやってきた参拝者は、まさに冴え返る寒さを感じる寺である。その庭に行んで早春の寒さを肌で感じている作者には、羅漢像の柔和な表情も、きつと寒さをこらえる厳しいお顔に映ったに違いない。まさに「冴返る」である。

春燈やト音記号の迷路めき

西尾 玲子

季語は「春燈」で春。

「春燈」は文字通り春の夜に灯す明りである。春の夜、電灯の下でひとり時を過ごす作者は、少し情緒的になっているのだろうか。楽譜を手に音楽を聴いているのかもしれない。掲句の中七以下の「ト音記号の迷路めき」という措辞が、作者の心のありようを表わしている。

ト音記号は、「G」の字を装飾化した楽譜上の記号であるが、あの複雑な曲線とそれに挟まれた狭い余白は、確かに迷路のようにも見えなくもない。ただ、普段楽譜

を見ていて、そんなことを思うことはない。春燈の下でひとり楽譜に目をやっていると作者は、直感的にそう感じたのではないだろうか。作者の豊かな詩的情緒が、ト音記号をそのように見せているのだ。掲句は、作者がその心のありようを素直に詠んだものだろう。

戸袋へ羽毛や紐や雀の巢

山川 和代

季語は「雀の巢」で春。

雀は、二月の半ばから四月の上旬に、民家の屋根瓦の下などに巢を掛ける。巢の材料は、小枝や枯草などで、観察していると、親鳥がそれらの材料を口にくわえて営巣場所へ入っていく様子を見ることができ。掲句も、作者の目がとらえた雀の巣作りの一場面を詠んでいる。作者の自宅であろうか。雀が羽毛や紐を啜って戸袋に入っていくのだという。

さて、作者は「厄介なところに巢を作ってくれた。」と思ったのだろうか。それとも「親雀、頑張つて巢を作っているな。」と思ったのだろうか。きつと後者の方であろう。中七の措辞が作者の思いを伝えている。作者は、雀の行動を度々観察しているのだ。「羽毛や紐や」という措辞は、作者が雀の巣作りを温かく見守っている様子を想像させる。

藁さがるけふは二筋雀の巢

高浜虚子

句集・著作紹介 和出 昇

新井大介句集『水平線』（二〇二一年三月二十五日、角川書店）

「ににん」（岩淵喜代子代表）同人。平成二十年から令和二年までの三六二句を収めた、第一句集。岩淵代表は序にかえてで「子供の頃から海外生活を日常としながら暮らしてきた新井さんにとって、日本の歳時記を頼りながら季節を感じる事が俳句作りだった。言い換えれば孤の立ち位置での季節の確認が作品として積み重ねられてきた」と述べる。

秋澄むやどの窓からも水平線

春分の湯呑に残る温みかな

ひそひそと大事な話ヒヤシンス

武藤紀子著『宇佐美魚目の百句』（二〇二一年四月一日、ふらんす堂）

「円座」主宰。句集『円座』『朱夏』『百千鳥』及び『冬干潟』を上梓。本書は、昭和二十五年から平成二十三年（「円座」創刊号）までの魚目の俳句百句を掲載、各句に註釈を付記した。魚目の作句の背景等が良くまとめられている。あとがき「美を求めて」で武藤主宰は「自身魚目に強く惹かれたのは、美というものではないか」と述べる。

火の山の銀河は髪に触るるかに

東大寺湯屋の空ゆく落花かな

一山の鳥一つ木に秋の晴

川嶋一美句集『円卓』（二〇二一年四月二十日、本阿弥書店）

「なんぢや」（榎本亨代表）同人。句集『空の素顔』に続く第二句集。句集名は次句、円卓の対面とほし青葉雨

中原道夫「銀化」主宰は帯文で「川嶋一美は「沖」の時代より更に明確に「取り合わせ」の技術を修得したようだ」と述べる。

鷹化して鳩となりけり巫女溜り

ひろうすの中の曼茶羅山眠る

寒雀夫の永い留守の窓

どの雲も途中なりけり秋遍路

立枯れの影あたたかき障子かな

伊吹嶺自註俳句シリーズ④『櫻井勝子集』（二〇二一年四月二十日、豊文社出版）

「伊吹嶺」（河原地英武主宰）同人。平成十九年から令和二年までの三百句を掲載。作者は病の不安を抱えながらこの句集を書き上げたとの事。あとがきで「伊吹嶺で一番の喜びは、みなあたたかい人達であることです。素敵な人々と一緒に、好きな俳句を学ぶことが出来るという幸せは、生きている喜びそのものです」と述べる。

碧の句碑訪へば漂ふ雪蛩

土雛残る農家の通し土間

綿菓子や施設の子等の秋祭

（筆者住所 〒444-0943 岡崎市矢作町金谷55の3）

俳誌紹介

浅野まこと

「かつらぎ」 二月号（通巻一〇九四号）

宝塚市

森田純一郎主宰「菊乃井」十四句詠。「俳句に学び生き方に学ぶ」で、西岡たか代が高齢者の誌友作品を鑑賞

〈不器用な中身の見ゆる落し文 小島洋子（85歳）〉

「完全に巻ききれずにいるこの虫は不器用かも？」と、ユーモアが溢れる楽しい句となった。

〈無粋とも野趣とも苑の牛蛙 水谷 霞（85歳）〉

聞き惚れるとは言い難い声に、なるほど作者の言い当てた「無粋」「野趣」。大自然の中で堂々と生きる牛蛙。

吉野行き特急葛の中走る

森田純一郎

不揃ひの高き城垣秋惜む

西岡たか代

「かびれ」 二月号（通巻第一〇七二号）

日立市

大竹多可志主宰「令和二年仲冬」八句詠。「俳句いろいろ」俳句の詠み方」で、主宰は「私たち、かびれ」の目指す俳句は、日常生活に根差した季感詩俳句である。

その表現は現実・事実を単に説明・報告する事ではなく詩的感性を詠うことである。詩とは意味性と音楽性により

成り立ち、俳句は、思いは深く、平明に詠うものと思っ

ている。季感詩俳句は自然の変化と自分の思いが融合した時に誕生するものである。「大切なことは変化とパラ

ンスである。俳句の調べ良くとはその俳句に合ったリズムを追求することである」と述べる。

男らの秘密の場所や菓喰

大竹多可志

「駒草」 二月号（通巻一〇三九号）

川崎市

西山睦主宰「鳥籠」十句詠。「ゆりこのどうよ！この俳句」で、西山ゆりこは「校正に百パーセントは無いと言われる。初校、再校、あるいは三校までか。見直して

これで良しとなった時に、校了」となる「字間をさまざまに視神経は張りつめ、周囲とは別世界にいるようである。そして、校了の赤い判を押し糸が抜けたような解放感」

「人間は単純で、感じ方のパターン」がある。心臓がドキドキしたり、顔が熱くなったり。が、ライターズハイというべきか、校了の昂りのパターンの表現は」と。

十字架の影が舗道に十二月

西山 睦

てのひらを頬へあてがひ冬隣

西山 睦

「春塘」 冬季号（通巻第七十五号）

東京都

清水和代主宰「青潭抄」三十八句詠。「俳句塾」で、金澤英子は、上田五千石「完本俳句塾」より抽出。

〈好きな人めつきり減りし賀状書く 上田五千石〉

最高級の読者を信じて句をつくらなければならぬ。しかし、また、最も低い読者の理解を拒絶するていの句であってはならない。名句はかならず、深甚微妙の妙味を期待しながらも、なおかつ、浅く、易しい表情をもって、誰にでも接してくれるものだ。正しく、美しい日本語の表現を磨くことに、こころし、懸命でありたい。

大空の開かれてゆく朴落葉

清水和代

秋の蝶そこは私の座る場所

金澤英子

「獅子吼」 二月号（通巻第九八二号） 岐阜県

大野鶴土宗匠「夢に引く弓」三十一句詠。「翁忌追善俳諧興行記」で、宮本光野は「十二月六日、午前十一時より一同着座」執事の開会の辞「翁像の厨子の扉を開き燭を灯す」執事の「插花」の声に一輪の冬椿が捧げられる「主筆出座」主筆があらかじめ付け進めたところまで読み上げ、付合に入る「付け句は、上五・中七・下五と付け句した者が別々に順次吟じ、主筆が復唱」主筆が全体を復唱し、宗匠の意を伺う「宗匠が領けば採用」「不採用の場合は、付け句を会衆に求める」（以下略）と。

夢に引く弓もありけり冬椿 大野鶴土  
見はるかす嶺々の青さよ冬椿 宮本光野

「青山」 二月号（通巻第四百五十九号） 東京都

しなだしん主宰「わかさぎ」七句詠。「感覚のかたち 中村草田男」で副主宰井越芳子は哲学者・フランス文学者の中村弓子著『わが父草田男』を紹介。へ毒消し飲むやわが詩多産の夏来る 草田男「戦前の『ホトトギス』時代の筆跡は、高校や大学のころのノートの字と変りない」戦後の『萬緑』創刊のころ以後になると、字が丸くふくらみ、リズムミカルな力強さを持った筆跡に「筆跡が変わるといのは人間の内面に大きな意識的転換が」と。

あをあをと雪崩のあとの空がある しなだしん  
肩書に名譽の二文字老の春 山崎ひさを  
秋の蟬出土の土器は炎のかたち 井越 芳子

「対岸」 二月号（通巻四百十四号） 茨城県

今瀬剛一主宰「春待つ」十五句詠。「対岸集の十句」で〈グラウンドに並ぶ賞品紅葉晴 雨宮文枝の句を「この作品の目の付け所は特に非凡である。一面の紅葉に囲まれたグラウンドである、そこに沢山の賞品が並んでいる。表現しているのはそれだけのことであるが読んだ者はそこからいろいろのことを想像する。運動会であろうか、それも始まる前の情景かも知れない。そうだとすれば晴れ渡った空の許くつきりとした白線まで見えてくるのではないか。表現が要を得ている」と主宰評釈。

煮零れて炉火の炎を汚すなり 今瀬剛一  
綿虫や暮色を急ぐ神の森 成井 侃

「扉」 二月号（通巻358号） 東京都

坂本正一郎主宰「風韻集」十句詠。「お酒の雑学・小話」で、大河内基夫は「江戸時代は、冷害による凶作が頻発、繰り返して食糧危機に見舞われた」「一方、豊作の年には、米価が急落し、幕府や諸藩の財政を圧迫した」「そこで、幕府は米価を安定させるために、米を原料とする酒造を統制」二そのため、農村での醸造を禁止し、酒造業の都市集中化を図り免許制とした「酒造は新酒、間酒、寒前酒、寒酒、春酒と年に四―五回仕込まれてきたが、米作の豊凶が判明する前に仕込を始める新酒づくりを禁止」と。

薪割りの木口匂うて冬うらら 坂本正一郎  
親子象鼻振り上ぐる小春かな 大河内基夫

「年輪」二月号（通卷七七〇号） 伊勢市

坂口緑志主宰「法華経」十五句詠。「編集後記」で、橋本石火は「特にお香が好きというわけではないのだが、お香を売っていると、つい買ってしまう。そうやっていくつかのお香が、玄関の靴箱の一角にある。それらのお香の中で、使うお香といつまでも使わないお香が混在」「香炉は、初めは線香を立てるだけの台に穴があるだけのものや、円錐形のお香に用いる皿型のものであるだけだったが、球形に脚が付いた香炉に出合った」「ゆとりがないからこそ、お香を楽しみたい、ゆとりを作りたい」と

しじみ蝶風に翅立て神迎ふ  
坂口緑志  
茶の花や土偶の口は真円に  
橋本石火

「牡丹」二月号（通卷四百五号） 名古屋

辻美智子主宰「日脚伸ぶ」十句詠。「俳句随想」見るは観るなり」で、師系の稲畑汀子は「芒に憑かれた女性から、芒の葉で染めた絹糸をもらった」「緑色の青芒の葉で染めたというのに、まるでそれは芒の穂のように美しい銀褐色に輝いていた」「草木染の色というのは不思議である。たとえば、花の咲く前の桜の枝で染めるときはいいさくら色になる」「私はこの話を聞いて祖父の句を想い出した。へ紅梅の紅の通へる幹ならん 高浜虚子」

「客観写生というのはおそろしい」「よく見る、深く観るといふ訓練を続けていると、自然の神秘がのぞける」と。

一言の心にふれし賀状かな  
辻美智子

「山繭」二月号（通卷四九四号） 伊賀市

宮田正和主宰「春便り」十二詠。「俳句つれづれ」「野ざらし紀行」の「捨て子」の話」で、松村正之は「猿を聞く人捨子に秋の風いかに 芭蕉」の句を「当時の旅では野ざらしになる可能性は十分にありました。そうなくてもそれを天命と考えようという気持ちがある。前のめりに捨て子を見捨てるといふ表現になった」「この天命の捉え方が、家も捨て名も捨てて、俳諧の誠の道」を追い求めるその後の芭蕉の生き方へと繋がった」と。

フアックスのかたかた届く年の夜  
宮田正和  
子の忘れし箱やころころ櫟の実  
福山良子  
波先の餌を駆けて追ふ磯千鳥  
松村正之

「若竹」二月号（通卷一〇六六号） 西尾市

加古宗也主宰「流水抄」二十句詠。「句鑑賞」のびのびとたおやかに」で、工藤弘子は「春の日や並んでをれば列のびて 田口葉於」の句を「葉於さん執筆による、鬼城千景」は、二年五ヶ月にわたり若竹誌に掲載「この度は、村上鬼城賞新人賞を受賞」「掲句は、何の列と明示してないので想像がふくらむ」「列伸びて」に麗らかな春の日差しを浴びた人々の佇まいや騒めきが伝わる。読者をゆったりとした気分誘いに、余情に遊ばせてくれる」と。

おぼろ夜の湖に竿さす男かな  
加古宗也  
三方を紅葉明りの御座所かな  
工藤弘子  
（筆者住所 〒480-1219 瀬戸市窯町322-134）

## 花火待つ

藤島 咲子

一瞬のうちにはかなく消える花火に、ひとびとは何を感じていたのであろうか。

どよめきて花火の闇を傾がせる 加藤 耕子  
ねむりても旅の花火の胸にひらく 大野 林火  
暗く暑く大群衆と花火待つ 西東 三鬼

私の中の花火の記憶は、富山県庄川中流域河川敷、大  
山木曾川、津島天王川公園、豊橋から来て岩倉のとある  
スーパーマーケット駐車場での手筒花火など。

楽しみの少ない子どもころは、庄川の花火大会を心  
待ちにしていた。とはいえ、河川敷まで出かけた回数  
数えるほど。たいていは、自宅庭より眺めたのである。

近年はテレビで長岡の花火大会・秋田大曲の花火競技  
大会の映像を、音楽とともに打ち上げられる物語(?)  
性を楽しむのが多くなった。

今ひらく花火の中へあゆみゆく 山田麗桃子  
その次のすこし淋しき花火かな 山田 弘子  
遠き闇終の花火と知らで待つ 野澤 節子

ところで、愛知県岡崎市の名産品「三河花火」は三河  
武士の火術を起源とし、江戸時代に観賞用として許可さ  
れて以来、諸国の技術的な先駆をなしてきたそうである。

教室で「花火」が夏季か秋季かと話題になったことが  
ある。『角川俳句大歳時記』より抜きます。

○夏の解説 夜空にまさに花と開くあざやかさと、一  
瞬のうちに消えてしまうはかなさが人の心をとら  
え、夏の風物詩として親しまれている。

○秋の解説 隅田川の花火が始まったのは、享保一八  
年(一七三三)五月のこと。以後、例年川開きか  
ら三か月間、江戸の夏を彩った。初期の歳時記が  
「花火」を「送り火」と並べて七月(陰曆)とし  
ているのは、それが盂蘭盆会の景物であったため  
と考えられる。隅田川の花火も飢饉や疫病による  
死者の供養を願う水神祭に使われたものだった。  
川開きの催しとして定着すると、近世においても  
夏の季節感が強くなっていた。

昨年からの花火は密にならないように、いつ・どこで  
の予告なく、工夫され、秋の解説にあるような濃い  
ものであったろう。

## コロナ禍を暮らす

棚橋 洋子

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

芭蕉

コロナ禍の自粛が続く中、久しぶりに谷川俊太郎のエッセイ集「ひとり暮らし」を何十年ぶりに読みなおして、この句に出合った。ホトトギスの新歳時記六月、閑古鳥の一番に乗っているくらい有名な句であるように、全く覚えていなかった。題は「聞きなれた歌」、カッコウは歳時記では夏の鳥と…で始まる。アメリカのニューイングランドの詩人、エミリー・ディキンソンが駒鳥とカッコウを比べて綴った詩（中林孝雄訳）があり、氏はその詩について考えを述べている。「日本ではカッコウは古名を閑古鳥といってさびしいものだ思われているらしい」と続く。現代では「カッコウ、カッコウ」と鳴くので郭公の

方が親しみやすい。因みに忍び音もらして鳴くのは時鳥である。また氏は「さびし」は古語辞典によると「本来あった生氣や活気が失われて荒涼としていると感じる意、そしてもとの活気ある望ましい状態を求める気持でいる意」で芭蕉はウツからの救いを求めていたのかもしれない、と。堀信夫氏も同じ解釈をされている。鬱屈した辛い思いをかこっているこの私を、お前のその寂しい鳴き声でどうか心安らかな気持ちに落ち着かせておくれ。と。愛知県も三度目の緊急事態宣言が発出された<sup>注1</sup>今、私たちは鳥のさえずりを聞く心のゆとりと耳を失ってしまっていないだろうか。かたばみの黄色い五弁の小さな花を道端に見つける目を持っているだろうか。休耕の畑に吹く茅花のやさしい風を頬に感ずることができているだろうか。一日一日自分自身に問いながら一つ一つに心を留めて丁寧に暮らしていく事を思っている。

（注1）令和三年六月十五日現在

節氣・俳句の中国語訳

世界無形文化遺産リストに登録された二十四節氣は、東アジアの農業生産を主とする国々の共有の文化遺産である。節氣や花に関する俳句を漢訳して、読者に漢語の詩形の多様性を理解していただくと同時に、「和して同ぜず」といった俳句と漢詩との趣の違いを味わっていただきたい。六月は、「芒種」「夏至」という二つの節氣を描いた俳句を選び、王衆一総編集長が「漢俳」で、日本俳人協会会員の王岩氏が「漢詩」の七言二句で漢訳し、読者と共に鑑賞する。

芒種 六月五日

夏至 六月二十一日

嫁ぐ子の白きうなじや百合の花

(川口洋子)

丘に立ち夏至の地球を抱き込む

(小澤克己)

有女出閨閣

悄然夏至来

娇颈洁净如素帛

丘巔站立胸襟开

又似白百合

地球攬入怀

(王衆一 訳)

出嫁女儿脖颈白  
一枝百合盛开时

(王岩 訳)

昂然挺立山丘上  
夏至地球搂入怀

(王岩 訳)

何思ふ子の横顔や百合ひらく

(和田祥子)

異国にて夏至の銀河を仰ぎけり

(川島澄子)

小儿侧颜乖

若有所思自托腮

幽幽百合开

(王衆一 訳)

骚客居异邦  
夜下苍穹独仰望  
银河夏至长

(王衆一 訳)

何所思矣儿侧脸  
亭亭百合盛开姿

(王岩 訳)

遥思异国浮萍日  
夏至银河仰望时

(王岩 訳)

简体字(中国)・常用漢字(日本)対応表

洁―潔 开―開 时―時 儿―児

怀―懷 异―異 长―長  
「人民中国六月号」より



こだま

受贈誌紹介（主宰の一句）

村田まみよ 抄出

握りたる万年筆の淑気かな

加藤 耕子

「圓」二月号より

合評鼎談（伊藤伊那男×高柳克弘×堀田季何）

●加藤耕子（耕・Kō）「落し文」

高柳 花開くよきことのみを日日の糧

含みのある、いい表現です。〈よきことのみを日日の

糧〉と言っているということは、逆に悪いことが結構あったんじゃないかな。その悪いこと、忌まわしきことの中で、数少ないがぼつぼつと〈よきこと〉があつて、

「悪いこと」をあまり気にしないで、〈よきことのみ〉を糧にして生きていく。そういう前向きな生き方の表明か。

ちよつと標語的なところもあつて、スローガンとか標語とかが否定的に使われるが、〈物いえば唇寒し秋の風〉とか、芭蕉にも標語的な句はたくさんあるし、俳句と箴言、標語みたいなのはそうきれいに切り離せないような気がします。俳句は文学で、標語は文学ではないのか。そうとも言い切れないところもあつて、この句もちよつと標語的だけれど、俗っぽいところも糧、養分にし

ての詩情が花開いた句かな。

伊藤 私もその句が好きでした。〈よきことのみを日日の糧〉、前向きで、この人の強さがここにあります。

高柳 言葉一つ一つは明るい、実は日々の鬱屈した思いとか、よくないことがあつたりとか、そういうのが背景にあるんじゃないかと思わせるところがあります。

「俳句」六月号より

続々・日本の樹木十二選

広渡敬雄 抄出

口上や花楓降る村歌舞伎

加藤 耕子

楓の花が降る中、口上も朗々と伝統ある村歌舞伎が始まる（耕子）。

「俳壇」六月号より

受贈俳誌主宰・代表の一句

編集部 抄出

真摯なる令和の宸旨あたたかし

加藤 耕子

「青海波」六月号より

現代俳句鑑賞

倉橋 廣

人の世の疫病や四囲の木々芽吹く

加藤 耕子

（俳壇三月号 特別作品10句「幣辛夷」より）

こちらは「疫病」を使用した例である。人の世はコロナ感染の拡大で危機的状況だが自然の世界ではコロナと関わりなく、木々の芽吹く春がきている。自然の強さ、偉大さを詠って鮮明である。「繪硝子」六月号より

俳壇月評

大山文字

落し文山の要に朗人句碑

加藤 耕子

『俳句』四月号「落し文」より

昨年十二月に九十歳で亡くなられた有馬朗人「天為」主宰は高名な物理学者であり、第二十四代東京大学総長であり、元文部大臣であり、もとより稀有な俳人でいらした方である。その句碑は北海道から九州まで全国に建立されている。しかし作者のお住まいから考えると愛知県内に建てられた句碑と想像できる。かの世の朗人先生からのメッセージのような落し文を手には、俳句界の要のような存在であられた姿を偲び追悼された一句と拝見した。

「火星」六月号より

受贈俳誌の主宰・代表の一句

巻頭の一句

田端千鼓 抄出

主宰の一句

踏まれても立ち上る草芳しき

加藤 耕子

巻頭の一句

野に出でよ土筆が丈を揃へ待つ

西尾 玲子

「薫風」六月号より

近着受贈各誌主宰・代表の一句

野村英利 抄出

そこだけに閑かさのあり冬桜

加藤 耕子

「たかんな」六月号より

受贈俳誌

古田紀一 抄出

木芽吹くほがらほがらと朝の鳥

加藤 耕子

「夏爐」六月号より

近着誌から

土割つてのぞくくれなる名草の芽

加藤 耕子

「日輪」六月号より

子鴉の声雨後の日の野にあふれ

加藤 耕子

「年輪」六月号より

現代俳句の鑑賞

岸本隆雄

山上の天守や花の吹雪く中

加藤 耕子

「俳句」2021・4月号「落し文」より

桜吹雪の空を見上げると、そこには真っ白なお城の天守閣がそびえている。この光景に感動も一入。感動は誰にでもあるものだが、日常の常識とは違って、意識を不意に破って現れる新鮮な衝動が即ち感動。これが句になる時、読む人にも同じ感動が伝わる。

「ひいらぎ」六月号より

五月号受贈各誌主宰の一句

編集部 抄出

木木芽吹くほがらほがらと朝の鳥

加藤 耕子

「方円」六月号より

秀句燦燦

梅枝あゆみ

「俳句四季」四月号（東京四季出版）

観劇の膝にたためる春シヨール

加藤 耕子

お洒落をして外出することは嬉しいことだ。行く先が  
楽しみにしていた観劇であれば、なお心が浮き立つ。季  
語「春シヨール」がそんな作者の気持ちを代弁している。  
柔らかな色合いのシヨールを華やかに巻いて出かけた。  
春と言っても外はまだ寒い、足取りは軽い。シヨール  
を膝に置いて開演を待つ時間さえも至福のひとつときであ  
る。  
（季語を詠む「春シヨール」より）

「煌星」六月号より

句会報

中村耕の会

（五月六日）

春の伊勢足神さまは坂の上  
藪椿言ひたきことの数知れず  
竿竹壳声張る路地や花空木  
幼な児の目の追ふところシヤボン玉  
新緑に囲まれ昼餉雀寄る

妙 子  
道 治  
春 子  
ツヤ子  
優 二

東耕会

（五月十日）

飽かずして眺むる庭や矢車草  
畏みて武家の末裔武具飾る  
仏頭に白鳳の笑み若楓  
旗持ちて集団登校春うらら

洋 子  
京 子  
つとむ  
清

言問句会

（五月十日）

妻逝きて三月が過ぎぬ春いづこ  
ただ空の青を見上げて燕子花  
昼灯す蕎麦屋なんじゃもんじゃ咲く  
数Iの教科書開く若葉風  
寺町に多き昼屋若葉風

清 孝  
路 子  
順 子  
由 理  
千 秋

尾張旭俳句会

（五月十二日）

教会のクルス金色麦の秋  
海原へ傾る菜の花明かりかな  
一叢の背丈伸びたる露刈られ  
舞ふほどに影いびつなり黒揚羽  
草笛のひと葉ひと葉の音色かな  
樟若葉地蔵に供ふ菓子おもちや  
アカシアの花踏みしめる雨あがり  
更衣面倒なるも楽しみも  
さざ波の下の平和や蝌蚪の国

敬 子  
昭 子  
めぐみ  
ユミ子  
チハル  
美 子  
せいこ  
千代子  
廣 子

樹の会

光りつつ堰を越す水谷若葉  
 木隠れの馬頭観音春落葉  
 校庭に藩校の碑や緑立つ  
 緋袴の面白き壺青楓  
 行く春や振り時計の重き音  
 高齢に前期後期や亀鳴けり  
 突と来て結界こえし夏の蝶  
 花散るを大和心と言ふまじく  
 大木曾や身を翻す夏つばめ  
 里山の風をほらみし鯉のぼり  
 道端のすかんぼの穂や丈伸ばす  
 木造の母校は図書館花は葉に  
 百年の本屋の軒をつばくらめ  
 長き文かしこで結び夜の薄暑  
 明治の香残る駅舎や春深し  
 父遺す本より菜薺匂ふ  
 檜皮葺きの本丸御殿花吹雪  
 両岸に茅花流しや暴れ川  
 独り酒朝摘み土筆の卵綴ち  
 棹になり鍵になりては帰る雁  
 名古屋城石垣に沿ふ松に蕊

(五月十三日通信句会)

倭の国の山河は青し武具飾る  
 春落葉乾きし音を重ねけり  
 輝きて何はともあれ五月好く  
 古い二人葉桜となる登城坂  
 啓蟄や軍手取り出す納屋の隅  
 大皿に庭の草花灌仏会  
 人形のかんばせ白し春の夕  
 夕風や桜葉降る池の傍  
 藤の花垂れて香りを杖の手に  
 戸袋の厚き古民家若葉光  
 瑞穂耕句会  
 新緑を分け展望台へエレベーター  
 更衣コロナ太りと云われけり  
 大仏の重きまふたや梅雨に入る  
 新玉葱四つ貰ふや夕支度  
 棕櫚の葉の隙間隙間の春満月  
 母の日の文添へ届く花と筆  
 高蔵寺教室  
 おはように返すおはよう若葉風  
 朴咲きて夕日に映ゆる里の山  
 伊那谷に広がりんごの花あかり  
 若葉風まうしるを向く羅漢様

(五月十七日)

めぐみ  
 さつき  
 制子  
 俊文  
 千秋  
 史子  
 文子  
 幸夫  
 あつ子  
 桃子  
 玲子  
 利恵  
 達矢  
 由季江  
 敦子  
 節子  
 青夏  
 康一  
 純子  
 久美子

山の湯やバス待つ間露を探る  
園児等の帽子青・黄やつばめとぶ  
豆飯や二人してむく茨の山  
新緑やテニスコートの音はずむ  
風薫る横断歩道の一年生  
叱られし事遥かなり葱坊主

水耕句会

若者の長き脛行く行く街薄暑  
斑蝥や逆らひて行く道もあり  
帳尻の中合はず薄暑の夕  
暮のなく励ましをるか嗤ひしか  
参詣の人の見とれる若楓

新樹句会 (通信)

若竹の並び垣根の新たななる  
降雨告ぐ忍者の如し雨蛙  
鳩つがひ軒下伝ふ梅雨の入り  
梅雨に入るパン焼く香り籠りけり  
筋を引く茨弾き出てゑんどまめ  
道標の馬頭観音矢車草  
連子窓残る城下や白餅  
高蔵寺教室 (月曜日)  
乳呑む子母も汗してしづかなり

さち子

富子

喜美子

秀雄

美智子

節子

(五月十九日)

さつき

はる子

一桂

好明

彦一

(五月十九日)

陽子

初子

美奈子

通子

蜜柑

桃士

野遊

(五月二十四日)

久美子

早朝の山に合唱ほととぎす

柏餅夫の選びし味噌の餡

行く春やめくり忘れしカレンダー

自販機を捜して歩く街薄暑

残り香や地に届きたる藤の房

芍薬の白に菩薩を見つけたり

白牡丹笑みこぼしたる妣若し

ハーヴェストムーン

長靴の音弾みをり梅雨の朝

母の手を真似て編みたる白詰草

犬山教室

花うつぎダム灌漑の水湛ふ

草引きて現る水草の碑の全長

夕日差す茅花流しの只中に

放つ矢の的射ぬく音五月晴

棒読みの首相答弁梅雨寒し

開けらるるタイムカプセルソーダ水

大地との力くらべや車前草ひく

ほととぎす七福神の名負ふ坂

楠句会

八橋のま青なる空かきつばた

杜若の池あをあをとありにけり

末春

純子

裕子

記代

曉美

友郎

遅雪

(五月二十五日)

洋子

幸代

(五月二十八日)

俊文

きよ子

美幸

直子

美津治

和恵

高子

洋子

(六月一日)

敦子

洸

軒下に干され十葉乾く音  
八橋や沢のほとりの杜若

熱田の森教室

父親の押す三輪車梅雨晴間

南天の花踏の水溢れ

絶えまなくボール蹴る音梅雨晴間

漂着物重なる汀梅雨深し

青梅雨や青の近江を聖火過ぐ

新調の長靴履きて五月雨

山紫陽花かつて布陣の武者の影

葎切の鳴かぬ日もあり空青し

フェンスよりはみだしてゐる四葩かな

遠足の子等呑みこみて森深し

夏雲や建築資材下ろす音

整へし山旅の荷や梅雨夕焼

中村耕の会

神宮の浅香の音風青し

先生の綺麗とほめし花うばら

出荷待つ一万坪の紫蘇畑

夕暮や鳥は西へ紫蘇畑

あじさいの一葉一葉に息吹あり

耕俳句会

紀代子

富美

(六月三日)

和代

里江

京子

克生

制子

昇

貞子

誉子

美佐子

馨子

稔子

咲子

(六月三日)

妙子

道治

春子

優二

ツヤ子

(六月五日)

素振りする球児の意気や松の芯

紫陽花や流れにまかすこともよし

新しき風を通して今年竹

茅花流しハーレー止まるそば処

梅雨ぐもり月蝕待ちし小学生

橋田氏が軍国少女を悔いし夏

あゆみ

五月十三日 樹の会(通信句会)

十四日 犬山教室(俊文)

二十日 熱田教室

二十三日 犬山教室

六月三日 熱田教室

五日 耕俳句会(榮作)

編集後記

外出自粛が続いて居ります。コロナワクチン接種お済みでしょうか。又、元のように明るく皆様方とお目にかかれるようにと思つて居ります。

梅雨に入つて、ここ数日晴れ続きと共に急に暑くなつて参りました。健康管理第一にしたいものです。暑さに強い木木がよく茂っています。

(耕子)

悟

史子

進一路

榮作

千明

英子

特 筆 神び盛り / 結社イ子推し俳人50人競詠  
 特別企画 詠めば爽快 / 最涼の季詠  
 巻頭作品10句  
 江崎紀和子・奥坂まや・黒田杏子  
 長浜 勤・行方克巳・堀本裕樹  
 森田純一郎・陽 美保子

# 俳壇

8月号  
 7月14日発売  
 定価900円(税込)  
 巻頭エッセイ  
 復本 一郎  
 八木 健彦 滑稽俳壇

特別作品30句……池田澄子  
 難解俳句を驚く……栗林 浩  
 小説・遙かなるマルキーズ語篇……マノン青原  
 ものがたりのある俳句……高柳克弘  
 いきもの歳時記……角谷昌子  
 俳句史を見直す……秋尾 敏

連載  
 俳句と随想12か月  
 菅野孝夫・柴田多鶴子

〒101-0064 東京都千代田区神田薬室町2-1-8 三喜ビル 電話03(3294)7068 発番00100-5-164430  
 本阿弥書店

# 戦争を詠む ということ

特集  
 後世に残したい  
 戦争を詠んだ一句

小澤 實  
 西村和子  
 蘭草慶子  
 衣川次郎  
 岡部榮一  
 米田規子  
 日原 傳  
 津高里永子  
 仲村青彦  
 堀田季何  
 永田 紅

◆好評連載  
 藤枝リユウジ  
 ◆その時、俳句を詠  
 青木亮人  
 ◆俳句と歌の10代競詠  
 二ノ宮一雄

◆好評連載  
 大西朋  
 神作研一  
 ◆古典舞を旅する  
 藤村公洋  
 ◆俳句のつみみ  
 一里吉里

2021年8月号  
 7月20日発売  
 定価1000円(税込)  
<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版  
 〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 俳句界 2021年8月号

# 文語と口語

それぞれの魅力

○文語の魅力 岸本尚毅  
 ○口語の魅力 坪内稔典  
 ○なぜ俳句は文語が主流なのか 中岡毅雄  
 ○文語と口語は混ざっても可か 成田一子  
 ○文語と口語 名句ピックアップ 依田善賢  
 加藤かな文 三宅やよい 山本一葉

特別作品30句 星野高士  
 タンゴ俳句界NOW 坂本宮尾  
 文学の森賞を讀む 富士真奈美×吉行和子  
 文学の森主催の各賞を鑑賞！  
 ◎文学の森賞：筑紫磐井・長瀬千晶ほか  
 ◎北斗賞：奥坂まやほか  
 ◎山本健吉評論賞 大井恒行  
 ＊セリシヨシ社「春耕」藝目良雨  
 秋の節 山田貴世「波」  
 佐高信の目で「コンテ」ハ！  
 吉原 毅 (筆名)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名！  
 日本一充実の投稿欄

※一部要史の可能性がります。  
 株式会社 文學の森  
 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-7 田島ビル8F  
 TEL 03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

耕の会		句会	研究会案内	指導	加藤 耕子
会名	日時	会	場	連絡先	
高蔵寺教室	毎月第4月曜 13:00~15:00	高蔵寺中日文化センター		清水 京子指導 (052-833-0717)	
高蔵寺教室	第1・第3水曜 13:00~15:00	高蔵寺中日文化センター		日比野里江指導 (0568-31-1668)	
名駅教室	第1・第3木曜 10:30~12:00	名鉄本社10階毎日文化センター		藤島 咲子 (0568-75-1517)	
俳句研究会 (樹の会)	第2木曜 13:00~15:00	鶴舞図書館		平戸 俊文 (0574-26-7859)	
犬山俳句と エッセイ教室	第2・第4金曜 13:00~15:00	犬山キャスト3階中日文化センター		平戸 俊文 (0574-26-7859)	
耕俳句会	毎月第1土曜 18:00~20:00	名古屋市東生涯学習センター		松田 榮作 (052-937-4356)	
尾張旭俳句会	毎月第2水曜 13:00~15:30	尾張旭市中央公民館		清水 京子指導 (052-833-0717)	
楠句会	毎月第1火曜 10:00~12:00	吟行句会		藤島 咲子指導 (0568-75-1517)	
瑞穂耕句会	毎月第3月曜 13:30~15:30	名古屋市瑞穂生涯学習センター		日比野里江指導 (0568-31-1668)	
水耕句会	毎月第3水曜 13:30~15:30	名古屋市東生涯学習センター		矢神 史子指導 (090-4868-3185)	
東耕会	毎月第2月曜 13:30~15:30	名古屋市東生涯学習センター		日比野里江指導 (0568-31-1668)	
東京句会	随 時	吟行句会		赤嶋 千秋 (03-3260-8680)	
ブラジル耕句会	毎月第4水曜 13:00~	富重久子居		富重 久子	
伊勢俳句 ソサエティ	毎月第2土曜 10:00~	伊勢市立図書館		伊藤 雅子 (0596-25-2511)	
中村耕の会	毎月第1木曜 13:30~15:30	名古屋市中村生涯学習センター		松本 優二 (052-411-9276)	
ハーヴェスト ムーン	毎月第3火曜 13:30~15:00	平野恵美子居		平野恵美子 (052-852-4920)	
言問句会	毎月第2土曜日 12:00~4:00	湯島		赤嶋千秋指導	
読売文化 センター	毎月第3水曜日 1:00~4:00	東京北千住		赤嶋千秋指導	
NHK文化 センター埼玉	毎月第4土曜日			赤嶋千秋指導 (03-3260-8680)	
英語俳句研究会	令和3年8月1日	通信句会		清水 京子 (052-833-0717)	
新樹句会	毎月第3水曜 13:30~15:30	小牧市北里市民センター		増田 野遊 (0568-79-8716)	





